

今週の為替相場見通し(2020年4月13日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.20 ~ 109.38	108.51	107.00 ~ 110.00
ユーロ	(ドル)		1.0769 ~ 1.0954	1.0934	1.0900 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		117.26 ~ 119.03	118.74	118.00 ~ 120.00
英ポンド	(ドル)		1.2166 ~ 1.2488	1.2468	1.2400 ~ 1.2650
(1英ポンド=)	(円)	*	132.36 ~ 135.75	134.86	134.00 ~ 137.00
豪ドル	(ドル)		0.5992 ~ 0.6369	0.6348	0.6200 ~ 0.6600
(1豪ドル=)	(円)	*	65.00 ~ 69.04	68.86	67.50 ~ 71.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 逸見 久貴

(1)今週の予想レンジ: 107.00 ~ 110.00 円

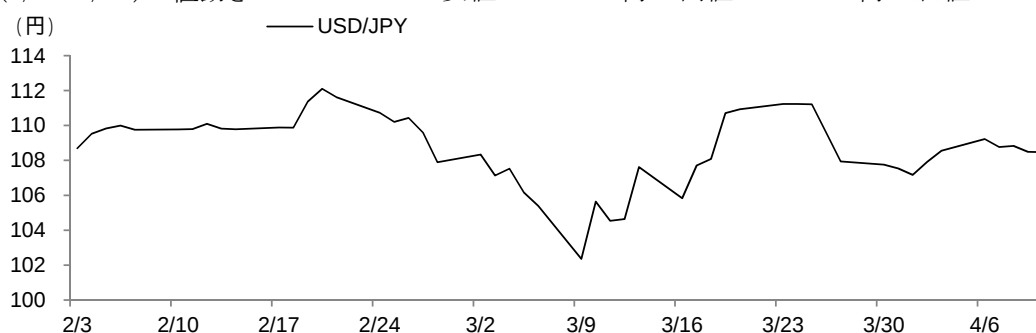
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル円相場は108円台後半で揉みあう展開。週初6日のドル円は108円台後半でオープン。欧州中心に感染者数の増加ペースが緩やかになっていることを背景にリスクオン地合いとなり、堅調な株式市場を横目にドル円も底堅く推移。トランプ大統領から感染拡大の懸念を和らげる発言がなされたこともあり、ドル買いが強まると、週高値109.38をつけた。翌7日は、安倍首相が緊急事態宣言するもドル円への影響は限定的。海外時間に入り、NY州のウィルスによる死者数が過去最多を記録したとの報道を受けリスクオフムードに。ドル円は軟調に推移し109円台を割り込む展開となった。8日は、前日の流れを引き継ぎ、ドル円は一時週安値108.51まで下落するも、日経平均株価が堅調に推移すると、連れ高となり109円台を回復。しかし、109円台での滞空時間は短く、再び108円台半ばまで売り戻された。9日は、翌日のイースター休暇を控え小幅な推移が続いた。米国時間にFRBが最大2.3兆ドルの景気刺激策を実施すると発表し、次第にドル売りが強まると、OPECプラスで原油減産の暫定合意が予想を下回る減産規模であったこともリスクオフの動きを後押しし、一時108.20円まで下落した後、108円台前半で推移した。10日はイースター休暇で欧米主要市場が休場となり積極的な取引は控えられた。米3月CPIが予想を下回るも反応は限定的。一日を通じて108.62-108.32と狭いレンジで推移した。

今週のドル/円はじり高に推移する展開を想定。引続きウィルス感染者数/死者数は増加しているものの、米国では主要都市のロックダウンが継続する中、感染のピークが近づきつつあるようである。また、感染の起点となった武漢の封鎖も解除となり、緩やかに正常状態に回帰しようとしており、現時点から再び各地で感染爆発が発生することがなければ、リスクセンチメントの改善によってグローバルに底堅く推移する株式市場がドル円のサポート材料となるであろう。また、米国の大統領選挙候補者争いからサンダース氏が撤退を表明したことで、急進左派リスクが後退。穏健派のバイデン氏が指名確実となり、こちらも市場にとってはリスク許容度を拡大させる材料であろう。今週の主な経済指標、イベントとしては15日(水)に米3月小売売上高、16日(木)に新規失業保険申請件数、ベージュブックの公表が予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/6~4/10)の値動き: 安値 108.20 円 高値 109.38 円 終値 108.51 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1100 118.00 ~ 120.00 円

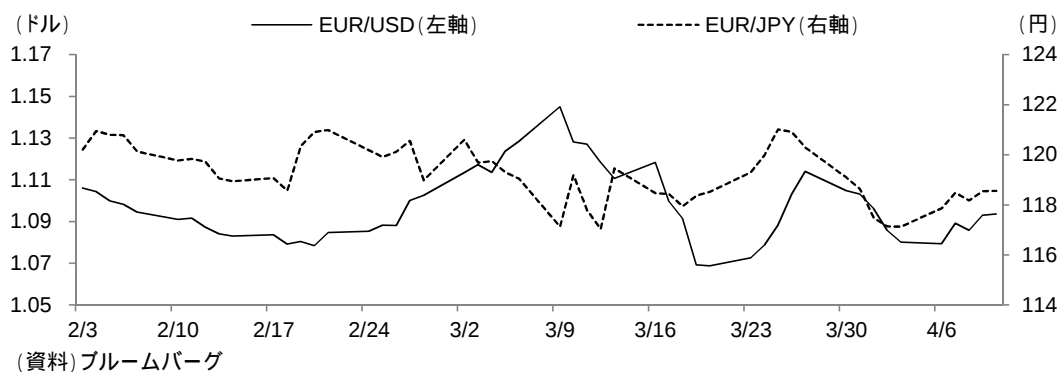
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に高値をつける展開。週初6日に1.08 台前半でオープンしたユーロ/ドルは、上値が重く一時週安値の1.0769をつけるも、スペインで新型コロナウイルスの感染者が4日連続で減少したことを受けて徐々に上昇した。その後も米株高を受けて堅調に推移したユーロ/円の動きや、ジョンソン英首相の病状悪化の報道を受けて上昇したユーロ/ポンドに連れ高となり、1.08 台前半で底堅く推移した。7日は新規材料に乏しい中、欧州株の堅調推移を背景としたユーロ/円の上昇にサポートされ一時1.09 台前半まで上昇した。8日は、EU財務相会合で新型コロナウイルス対策の合意に至らなかったとの報道に一時1.08 台前半まで下落。その後は米金利の上昇を受けて、ユーロ/ドルは小幅に上昇した。9日は、翌日のイースター休暇を控え、動意に乏しい展開であったが、FRBの追加措置の報道を背景にドル売りが進み、一時週高値の1.0951まで上昇した。10日は1.09 台での取引が中心となった。

今週のユーロは動意に乏しい相場が継続すると予想しているが、方向感としては比較的底堅い推移を予想している。先週は、コロナウイルス感染者数の減少や米国における大規模追加融資等のニュースに反応し、小幅にユーロ高となった。また、先週開催されたECB財務相会合では5900億ドル相当のコロナウイルス対応策で合意したが、ユーロ相場への反応は限定的だった。かかる状況下、ユーロはドル相場の動向に追随する相場展開を予想している。米国のコロナウイルス対策は規模を度返した徹底した内容の対策が今後も打ち出されると考えており、米国による経済の縮小を食い止める積極的な働きかけがマーケットには好感されると考えている。これによるドル相場の動きは足元の過剰なドル高が抑制されると考えており、この流れを受けてユーロは堅調推移となるのではないかと。リスクはユーロ圏におけるコロナウイルス感染拡大の悪化と考えており、その場合にはユーロ相場は軟調な推移となる可能性がある。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/6~4/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.0769 高値 1.0954 終値 1.0934
(対円) 安値 117.26 高値 119.03 終値 118.74



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2650 134.00 ~ 137.00 円

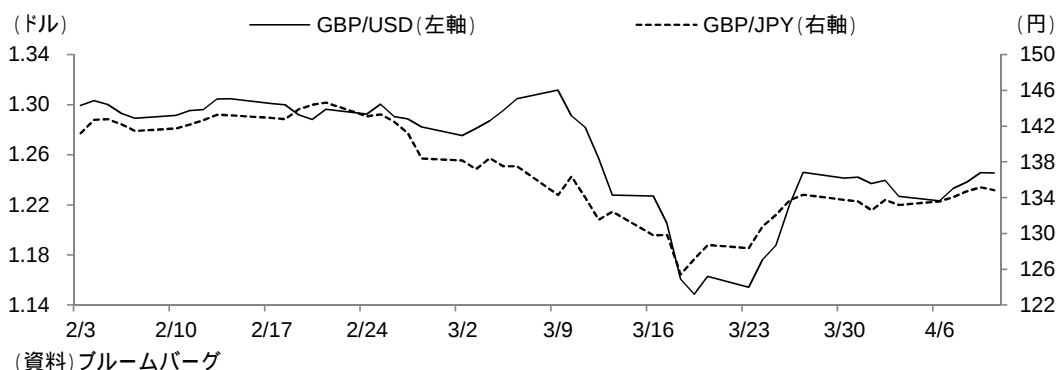
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、堅調気味の上下動が先行、週後半は頭打ちとなったものの、対ドル、対円共明確に水準を切り上げた。週明け6日、ポンドは堅調な滑り出しを見せたが、英時間夜になって反落。新型コロナウイルスに罹患し、5日に検査入院したジョンソン英首相の容体がこの時間になって悪化、集中治療室に移されたのがその原因となった。同首相は英時間の9日夜に一般病棟に戻るまで集中治療室にとどまったが、ポンドは7日になって早々に反発。同首相の容体が安定しているとの報が安心感を与えた他、並行して日本株、欧州株、原油価格などが堅調に推移したことも、「ドル需給逼迫」の緩和に対する期待感を高め、ポンドやユーロの反発を促したようだ。9日には英中銀と英財務相による方法と手段(W&M)ファシリティ運用拡大の発表、OPEC+による原油1,000万バレル/日減産暫定合意、米連銀による総額2.3兆ドルの追加流動性支援策の発表などが相次いだものの、金融市場の反応は交錯した。英のW&Mファシリティは、市場の一部に「財政ファイナンス」と色めき立つ動きもあったが(後述)、ポンドの反応は冷静で、むしろ堅調気味の推移。OPEC+の発表は、直後原油価格の急騰を招いたものの、程なく、「1,000万バレル/日では不十分」「合意が順守される可能性は低い」との見方が広がり、原油は急反落。米連銀の発表だけは、「ドル需給逼迫」の緩和に資するとの読みで、素直にドル全面安を招いた。前後して、新型コロナ対策を巡るEUの経済財務相理事会(エコフィン)の紛糾が見込まれたことが、或いは、対ユーロでのポンド反発を促した可能性も考えられた。10日は、欧米主要市場がイースター休暇で、動意の低下から、ポンドも膠着したまま週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、堅調気味の膠着を予想。金融資産市場に限らず、文字通り、世界中の耳目が新型コロナウイルスという未知の病気の動向に釘づけになった現状で、国と国、経済と経済の格差を取り引きする通貨市場に明確な方向感が打ち立てられる可能性は低いのではないかと。方向感を見出し難い環境で、敢えて堅調を中心に見込むのは、単純にテクニカルな要因から。先週、対ドルでの高値は10日の1.2488、対ユーロでの高値は9日の0.8726で、それぞれ直近高値(対ドルでは3月27日の1.2484、対ユーロでは4月2日の0.8738)をこらうじて上抜けながら、週引け前に押し戻された格好だが、対円では9日に135.74まで上伸し、直近高値(3月27日の134.69)を大きく上抜けたあとも、週引けまで135円台を維持した。対円で既に明確に上抜けた経緯に鑑みると、目先は、対ドル、対ユーロでも、対円での上抜けに続いて、上値余地を広げる展開の方が見込み易いのではないだろうか。需給の裏付けという目線で言うと、3月央に掛けてのポンド安が行き過ぎだったとの位置づけで、引き続き、調整的なポンド買い(戻し)が支配的になる展開を見込むことになる。水準的には、先週予想した1.20~1.25を中心とした値幅よりも、もう少しポンド高方向へのシフトを見込むことになるだろうか。英中銀金融政策関連では、16日に英中銀金融政策委員会のテンレイロ委員、17日にブロードベント副総裁、ハルデー委員が講演する機会があり、上述W&Mファシリティが「財政ファイナンス」ではないかと問い詰められる可能性もあるのではないかと身構えたが、同ファシリティは、もともと常設のものであり、政府の資金繰りを一時的に助けるだけで、「財政ファイナンス」には当たらないとの見方が既に広く共有された模様。ポンドの値動きに影響するような発言が聞かれる可能性は見込み難い。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/6~4/10)の値動き: (対ドル) 安値 1.2166 高値 1.2488 終値 1.2468
(対円) 安値 132.36 高値 135.75 終値 134.86



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 上地 遼

(1) 今週の予想レンジ: 0.6200 ~ 0.6600 67.50 ~ 71.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週初からじりじりと上昇する展開となった。世界的にコロナウイルスの感染者数増加が若干ながら頭打ちになったことや、豪議会で大型雇用対策法案が可決されたことが後押しした。週初の6日は0.5996レベルで東京オープン。一部の国で新型コロナウイルスによる死者の増加ペースが鈍化していることが好感され、米株先物やアジア株が値上がりを見せる中、買いが優勢となり0.61台を回復した。7日はRBAが政策金利の据え置きを発表すると先行きの不透明感を和らげる形となり、豪ドルは買いで反応、一時0.62台をつけた。しかし、ニューヨークでのコロナウイルスの感染による死者数が過去最多とのヘッドラインを受け、豪ドルは売り戻され、0.6160台でクローズした。8日はS&Pがオーストラリア国債の格付け見通しを「安定的」から「弱含み」に引き下げたとのヘッドラインを受けて0.6120台まで豪ドルは下落した。欧州の一部の国でロックダウン対応を止め、正常通りに戻すことを検討しているとの報道を受け、株価は楽観ムードから上昇し、それにつれて豪ドルも0.6230台まで上昇してクローズした。9日はアジア時間では上値の重い展開が続いたが、欧州時間には一転上昇した。OPECプラスにおいて日量1000万バレルの減産で暫定合意がなされるも、予想されていたよりも減産量が限定的であったことからリスクオフが進み米ドルが売られると、豪ドルは翻って上昇し、0.63台後半をつけてクローズした。10日はイースターでマーケット参加者が乏しい中、小幅にレンジ推移し、0.6348レベルで越週した。

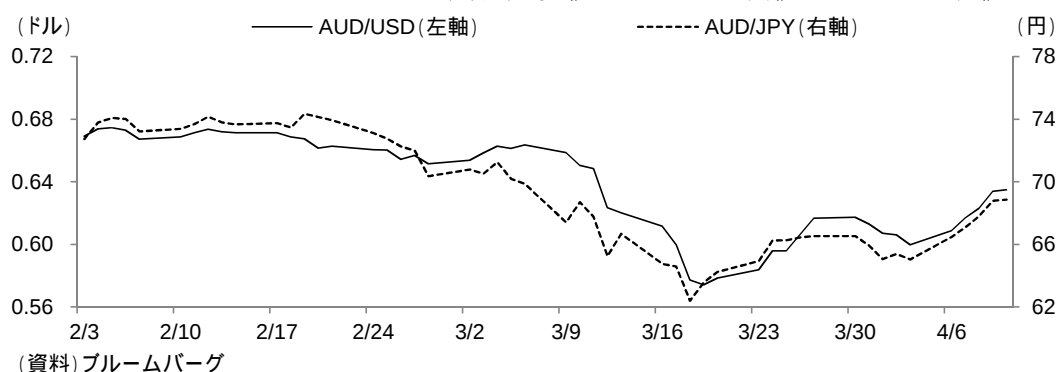
今週の豪ドルは、引き続きじりじりと上昇する展開を予想する。コロナウイルスの感染鈍化が世界各国で散見される中、市場は徐々にリスクオンムードへ移行している。明るい材料を探しており、ネガティブインフォには反応しづらくなっている様子。コロナショック前の水準(0.66台)と比較しても現在は安い水準にあり、底値の見える豪ドルは買いを呼びやすいと思われる。今週注目される経済指標は来週16日に控える豪雇用統計だろう。先週のRBAでも、今後の失業率の大幅悪化を予測している中、悪化は避けられないだろう。ただし、豪議会で約8.6兆円規模の大型雇用対策法案が可決されたことで、雇用統計の指標悪化も相場への影響は限定的となることが予想される。そのほかにも、来週16日には失業率(3月)の発表が控えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/6~4/10)の値動き:

(対ドル) 安値 0.5992 高値 0.6369 終値 0.6348

(対円) 安値 65.00 高値 69.04 終値 68.86



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。